

平成 18 年 10 月 28 日（土曜日）

甲賀市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

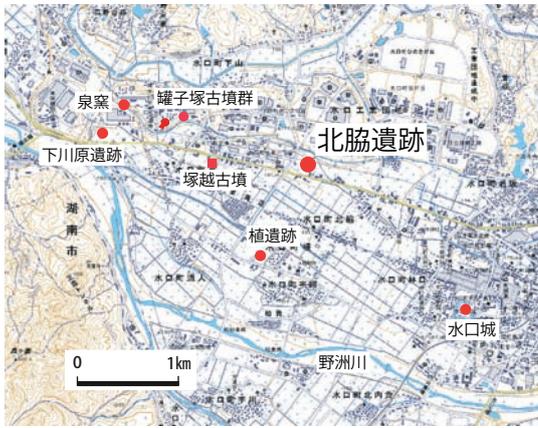
きたわき

北脇遺跡第 4 次調査現地説明会資料

北脇遺跡は滋賀県東南部、甲賀市水口町北脇に位置する遺跡です。岡本地先店舗開発事業に伴って甲賀市教育委員会が調査主体、財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関となり発掘調査を実施しています。今回、9 世紀後半から 10 世紀前半（平安時代前期から中期）の鍛冶工房が見つかりました。

1. 北脇遺跡周辺の歴史的環境

北脇遺跡の周辺には、野洲川に沿って東海道が東西に走り、山の多い旧甲賀郡にあつては比較的広い平地がみられ、発掘調査事例は少ないものの数多くの遺跡の存在が知られています。



古墳関係では古墳時代中期の東・西罐子塚古墳、金銅製甲冑が出土した塚越古墳、古墳時代後期の大規模な園養山古墳群などが知られています。集落関係では古墳時代中期から後期にかけての植遺跡や古墳時代後期から平安時代にかけての下川原遺跡が知られています。中でも植遺跡では古墳時代中期の大規模な倉庫が並び立ち、その後も豪族居館が営まれることなどが明らかになっています。窯業関係では、近江地域の中で最も古い須恵器窯である古墳時代中期の泉窯、北脇遺跡の北方約 4 km には平安京をはじめ西日本一円に緑釉陶器を供給した平安時代中期の春日峰道窯・春日山の神窯などが知られています。

また、旧東海道は、平安時代には齋宮への道として多くの貴族が通り、以降伊勢道として賑わい、江戸時代には水口城や横田渡が存在するように、大変重要な街道として知られています。

以上のことから、古墳時代以降近江の中でも注目される地域であることがわかります。





鍛冶関係遺物



須恵器・緑釉素地 (10C)

2. 調査の成果

今回の発掘調査においては、9世紀後半から10世紀前半にかけての掘立柱建物9棟、柵2条、溝3条、竪穴遺構などを検出し、それらに伴って須恵器・土師器・緑釉陶器・緑釉陶器素地といった土器類とともに、フイゴ羽口・炉壁・鉄滓・砥石といった鍛冶関係の遺物が出土しています。

9世紀後半の遺構は、4棟の掘立柱建物（SB1～4）と溝2条（SD3,4）です。柱穴から出土した遺物から、これらの建物では鍛冶作業が行われていたと考えられます。

2条の溝は、周辺から流れ落ちてくる水を受けるためのものであったと考えられます。

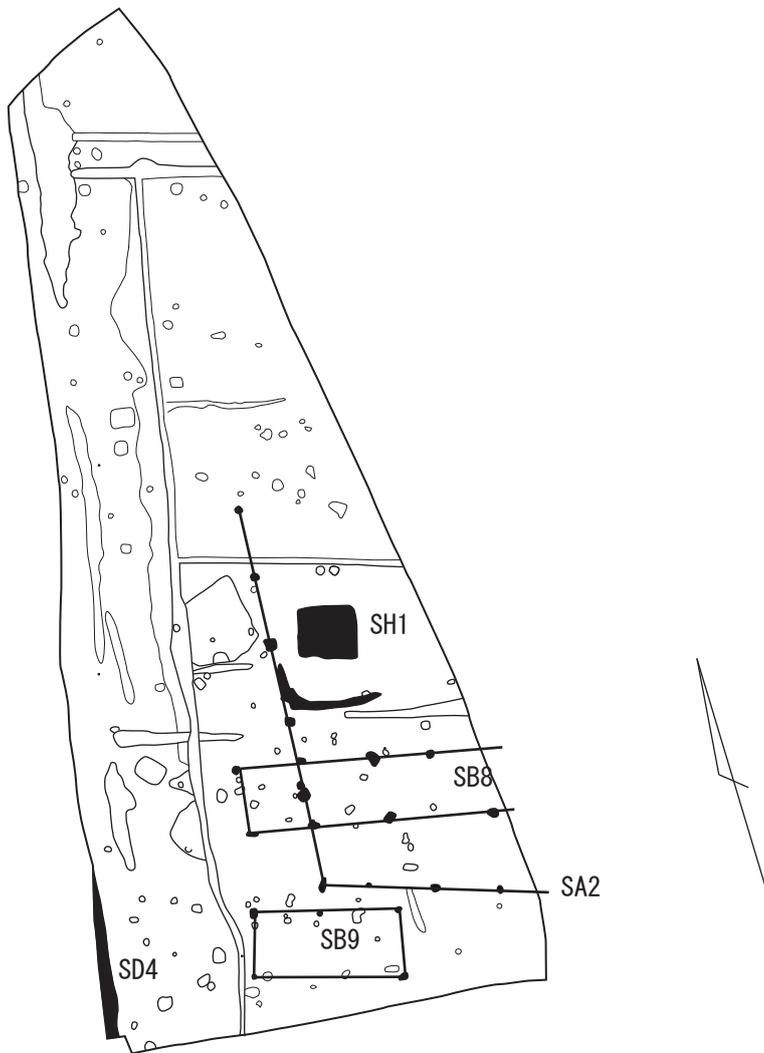
10世紀前半の遺構は、3棟の掘立柱建物（SB5～8）と柵1条（SA1）、溝2条（SD3,4）です。これらの建物は整然と配置されており、それぞれが2×10m程度の細長いもので、ここでも鍛冶作業が行われていたと考えられます。建物の形状から、一棟に数人の工人が作業していたと想定できます。10世紀半ば頃には鍛冶の廃棄物で溝を埋めていることから、この頃に工房としての機能を止めたと考えられます。

なお、鍛冶炉については、水田化の際に当時の地表面が削られてしまっているため残っていませんでした。ここでの鍛冶作業は、鉄滓の形状から製品にするにあたっての最終工程であったことがわかりました。

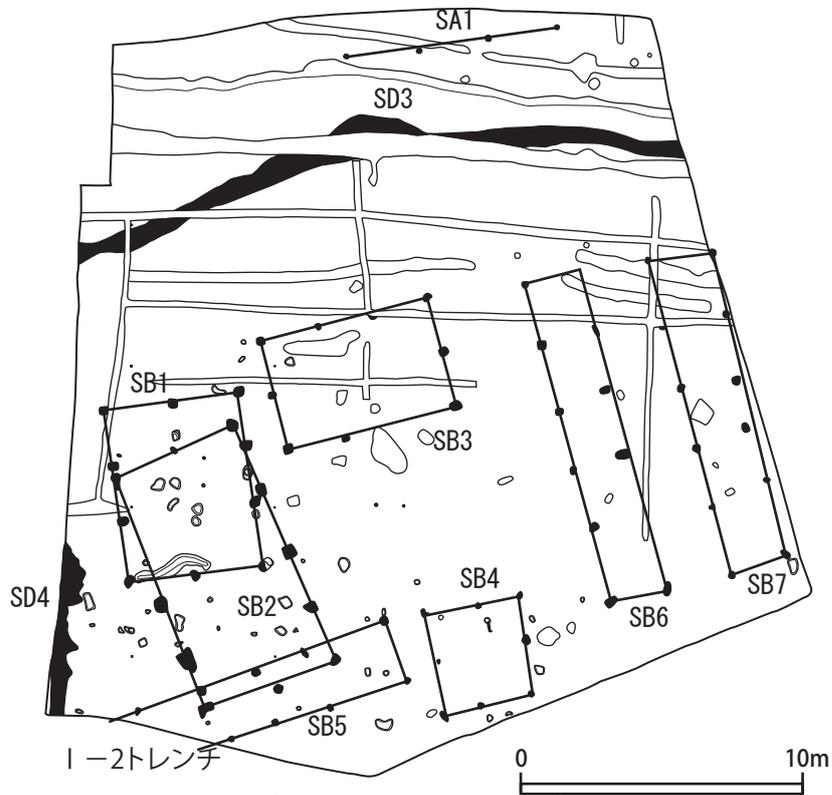
3. 北脇遺跡の調査成果

今回の調査では、一般の集落内に存在する鍛冶工房とは異なる大規模な鍛冶工房が見つかりました。中でも10世紀にはいると工房の編成がより大規模かつ集約的になっていったとみられます。つまり、小規模な自給的生産とは一線を画する背景があったとみられることから、公的もしくは有力氏族が工房の経営にあたったと考えられます。折しも、近隣の春日においては10世紀半ば頃から平安京をはじめとして西日本一円に緑釉陶器を供給した生産拠点が設けられます。こういった大きな動きと連動する可能性も十分に考えられます。

調査地周辺では、発掘調査事例が少ないことから全体像をうかがい知ることは困難ですが、今後の調査の進展によって、徐々に明らかにされていくものと思われます。



I-1トレンチ



I-2トレンチ

北脇遺跡 I-1,2トレンチ 平面図